

『計量国語学』アーカイブ

ID	KK300101
種別	調査報告
タイトル	コソア使用個人差の実験的記述—現場指示と非現場指示の 関わり—
Title	An Experimental Description of Deictic and Nondeictic Usages of Japanese Indexicals, <i>ko</i> -, <i>so</i> -, and <i>a</i> -forms.
著者	時本 真吾
Author	TOKIMOTO Shingo
掲載号	30巻1号
発行日	2015年6月20日
開始ページ	1
終了ページ	13
著作権者	計量国語学会

調査報告

コソア使用個人差の実験的記述

ー現場指示と非現場指示の関わりー

時本 真吾 (目白大学)

要旨

本研究は、日本語の指示詞 (コ・ソ・ア) の現場指示・非現場指示用法を実験的に記述することを通して、両用法の関わりを考察する。216 名の日本語母語話者を現場指示の個人差によって 3 群に分類し、非現場指示のコソアを含む様々な談話について、質問紙により適格性判断を求めた。コソア 3 形式と現場指示 3 群の別を独立変数、適格性判断を従属変数とした決定木分析の結果、コソア 3 形式の主効果、また、コ形・ア形について現場指示群との交互作用が認められた。さらに各実験参加者のコソア 3 形式についての適格性判断の相関を解析した結果、相関の強弱が現場指示群によって異なっていた。本実験結果は、現場指示の個人差が非現場指示に対応している点で、少なくとも部分的には現場指示と非現場指示が共通の規則に従っていることを示す一方、ある部分では、現場指示 3 群がコソア使用について、それぞれ異なる規則を持っていることを示唆するものである。

キーワード: 指示詞, 決定木分析, 回想のア

1. 背景: コソア現場指示の個人差と非現場指示の関わり

日本語の指示詞, ココ (コレ, コノ, コンナ等), ソコ (ソレ, ソノ, ソンナ等), アソコ (アレ, アノ, アンナ等) の用法について, これまで多くの研究が蓄積されてきた。話者が発話時に直接知覚できる対象を指示詞によって指示する場合の用法を「現場指示」(直示, 眼前指示)と呼び, 一般に佐久間 (1951) による(1)の三項対立説が受け入れられている。

(1) a. コ: 話し手の領域

b. ソ: 聞き手の領域

c. ア: それ以外の領域

ここでの「領域」が物理的遠近ではなく, 心理的距離の大小によって決定されることも広く知られている。例えば(2)で, 患者は自身の体の一部を, 聞き手の領域を指す「そこ」で指し示し, 医師は患者の身体部位を「ここ」で指し示している。この触診の場面では, 患者の身体部位は患者よりも医師に心理的に近いと理解できる。

(2) 医師の診察場で

医師: ここは痛みますか?

患者: そこは痛みません。

一方, 話者が, 発話時に直接知覚できない対象を指示する場合を「非現場指示」(文脈

指示)と呼ぶ。(3a)では発話場所から離れたラーメン店,(3b)では眼前にいない人物,(3c)では過去の一時点が,それぞれ,「ここ」、「その」、「あの」で指示されている。

(3) a. コの非現場指示

駅前に新しいラーメン屋さんができたでしょ, ここの味噌ラーメンが絶品だったよ。

b. ソの非現場指示

今朝, 外国人に道を尋ねられたんだけど, その人, 日本語がとても上手だった。

c. アの非現場指示

昭和 20 年 8 月 15 日, 戦争が終わりました。あの時, 私はまだ 6 歳でした。

非現場指示の用法については, 議論が収束していると言えなく, 様々な提案が試みられている。話し手と聞き手の間で共有されている知識の状態に説明を求めた久野 (1973) ならびに Yoshimoto (1986), 話し手の直接的知識と概念的知識の違いに着目した黒田 (1979), さらに, Fauconnier (1985) のメンタルスペース理論を積極的に援用し, 言語と世界をつなぐ中間構造としての知識モデルを仮定する金水・田窪 (1990), 「場」によって金水・田窪 (1990) の改良を試みた堤 (2002) が代表的なものである。ここで, コソア研究における未解決の問題の一つは, 現場指示と非現場指示の統一的説明である (金水・田窪, 1992)。実談話において現場指示と非現場指示は混在していて, 両者を区別する標識も無いので, 各用法について全く別の規則が発動されているとは考えにくい。また, 理論的にも, 現場指示と非現場指示の使用は統一的に理解されるのが望ましい。現場指示と非現場指示を統一的に説明する可能性を示したものとしては神尾 (1990) があるが, 議論の中心が直接形・間接形と終助詞「ね」の共起関係であることもあり, コソアの考察は基本的記述に留まっている。

ここで注意すべきことは, 指示詞コソアの現場指示に個人差があることである。各指示詞が対応する現場指示領域について, 個人間で多少の大小があることは言うまでもない。例えば, 話し手が自身から, どこまでの距離をコで指し示すかについては個人差があるであろう。しかし, 現代日本語話者については, コソア現場指示領域に, 連続的な遠近とは異なる質的な個人差が存在する。高橋・鈴木 (1982) は, 方言の影響を排除するために関東出身者を対象にした記述の実験を行い, 聞き手の直近領域のソとは別に, 話し手直近のコ領域の外側にソが現れ, 二つのソ領域がア領域で隔てられている話者の存在を確かめた。さらに, あずま (1987) は, このソ領域に挟まれたア領域が, 話者の出身地域に関わらず, 全国的に認められることを示した。また, 高橋・鈴木 (1982) とあずま (1987) の実験では, 話し手の直近のコ領域の外側にア領域が存在し, 話し手と聞き手を結ぶ直線上に, コ・ア・ソ領域がこの順に現れる話者の存在が確認されている¹。伝統的日本語話者の場合,

1 二つのソ領域がア領域で隔てられている話者の場合, ア領域より話し手に近いソ領域を「聞き手の領域」と理解することは難しい。Fillmore (1982) によると, 指示詞に三つの形式を持つ言語では, 中距離の指示詞に「話し手から見て中距離」と「聞き手から見て近距離」の二種類が多く認められる。ソ領域がア領域で隔てられている話者の場合, 二つのソ領域は Fillmore (1982) の指摘する二種類の中距離指示詞に対応しているように見える。また, 金水 (2001) は, 現場指示において, ソ形式とコ・ア形式とが必ずしも相補分布しない可能性を指摘し, ソ形式とコ・ア形式について別の規則を提案している。事実, 本稿のコソアソ・コアソ群話者は, 話し手-聞き手間中央の場所について「アが一番良いが, ソでも良い」と報告することが多く, コソアが現場指示で相補分布しない可能性を示している。但し, コソア 3 形式の現場指示における適切な分類と特徴付けは, 本稿の射程を超えるので, ここでは扱わない。

話者間の物理的距離に関わらず、話し手と聞き手を結ぶ直線上にアは現れないので、話し手と聞き手の中央に位置するア領域の出現は研究者に驚きをもって迎えられた。

非現場指示のコソア使用を司っている規則・原理の詳細は不明である。しかし、もし現場指示と非現場指示の使用が共通の規則に従っているなら、現場指示の個人差は非現場指示に反映されるはずである。そこで、本研究では(4)の可能性を検討する。

(4) コソア現場指示に質的な個人差が現存し、現場指示と非現場指示を司る規則に共通の部分があるなら、現場指示の個人差は非現場指示に体系的に現れるはずである。

本研究では、コソアの現場指示と非現場指示の関連を実験的に記述し、両用法の統一的理解への一助とする。まず次節で、コソア現場指示の個人差を実験的に記述し、話者を群別する。次に、様々な非現場指示を含む談話における適格性判断に基づき、現場指示個人差と非現場指示解釈の関わりを検討する。

2. コソア現場指示の個人差の記述

日本語を母語とする 216 名の大学生が本研究に参加した。まず、この参加者の現場指示におけるコソア領域を実験的に記述する。

実験参加者を数グループに分割し、約 15m 四方の部屋の中に分散して着席させる。実験参加者のうち 2 名を、部屋の中央に約 5m の間隔を置いて対面させる。この実験参加者 2 名をそれぞれ「話し手」、 「聞き手」とし、文具等の小物を室内の様々な場所に移動させ、「ここ / そこ / あそこ」のいずれかが相応しいかを話し手に問い、判断をホワイトボード上に図示により記録する。他の参加者は 2 名のやりとりを観察し、実験の趣旨を理解するように努める。室内の全域を問うた時点で、話し手と聞き手の役割を交代し、同一の作業を繰り返す。2 名の参加者が図示を終えたら、他参加者に実験の趣旨を確認し、各参加者は「話し手(私)の場所」と「話し相手の場所」を図示した手元の用紙に、自身のコソア領域を地図状に記す。実験参加者によるコソア領域地図の代表例を清書し、図 1 に示す。

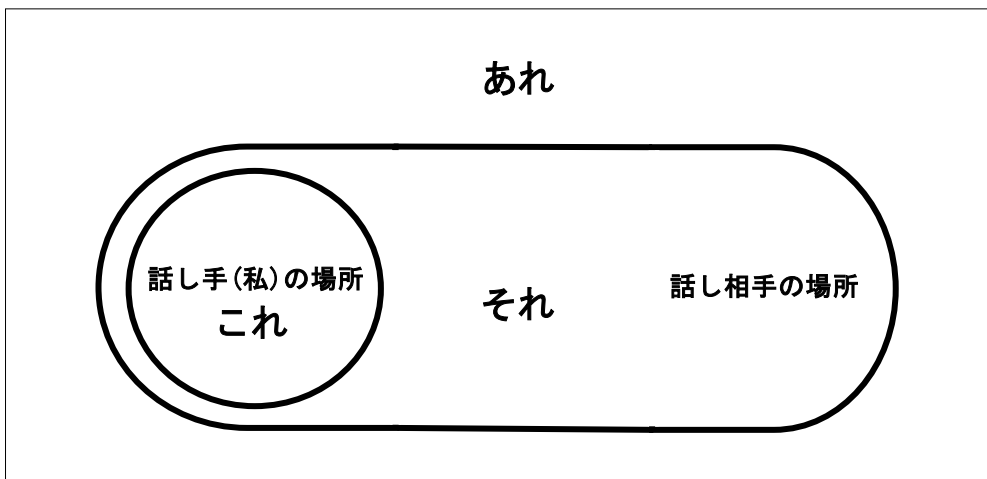


図 1: 実験参加者によるコソア領域地図の例 a. コソ群

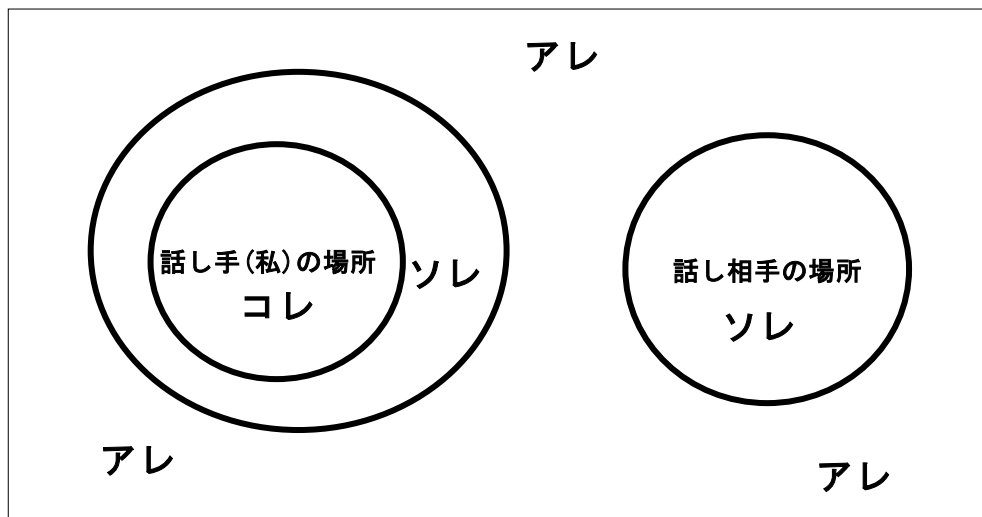


図 1: 実験参加者によるコソア領域地図の例 b. コソアソ群

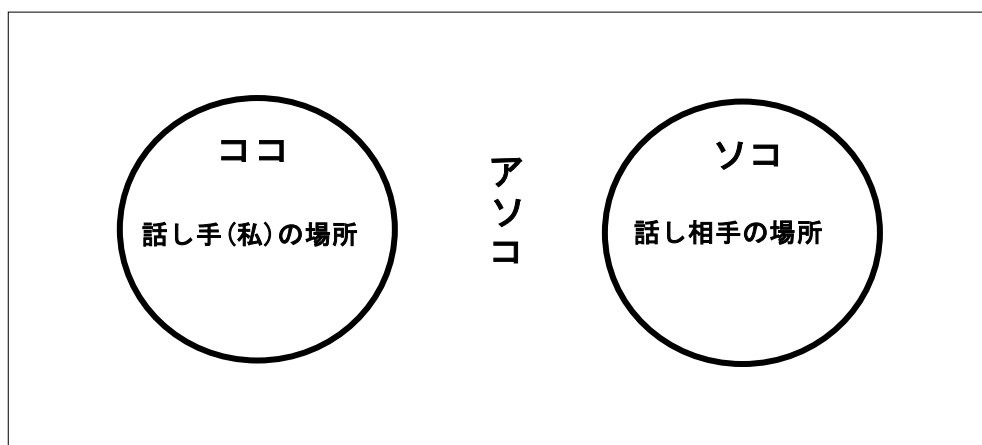


図 1: 実験参加者によるコソア領域地図の例 c. コアソ群

現場指示の個人差について特徴的で、理論的示唆が大きいと考えられる差異は、話し手と聞き手を結ぶ直線上に現れるコソアのパターンなので、話し手の直近にコ領域が存在し、聞き手に近づくにつれ、ソ領域に変化する（5a）タイプの話者を「コソ群」とする（図1のa）。また、話し手の領域の直近にコ領域が存在する点は同様だが、話し手から離れるにつれてソ領域が現れ、さらにア領域に変化し、聞き手の直近でソに変化する（5b）タイプの話者を「コソアソ群」（図1のb）、また、話し手から離れるにつれて、コ領域がア領域に変化し、聞き手の直近をソ領域とする（5c）タイプの話者を「コアソ群」とする（図1のc）。

(5) a. コソ群: 話し手 - コ領域 - ソ領域 - 聞き手

b. コソアソ群: 話し手 - コ領域 - ソ領域 - ア領域 - ソ領域 - 聞き手

c. コアソ群: 話し手 - コ領域 - ア領域 - ソ領域 - 聞き手

3 群それぞれの人数は、コソ群が 142 名、コソアソ群が 38 名、コアソ群が 36 名であった。

3. コソア非現場指示についての適格性判断

コソアについてのこれまでの研究を参考に、非現場指示のコソアを計 47 箇所含む談話を 30 作成し、質問紙とした。(6)に例示する様に、各談話につき、中括弧で示す箇所について、コソア各形式の適格性を「自然に使える」(良), 「最適ではないが不自然ではない」(可), 「不自然」(不可)の三者択一で問うた。

(6)a. 「先生、おかげさまで〇〇会社に就職が内定しました。」「{これ / それ / あれ} はすごい。おめでとう。」

b. 「今朝も駅前で民主党の〇〇さん、演説してたね。」「{この / その / あの} 人、毎日やってるね。」

談話の配列順は数通りにランダム化し、それぞれの質問紙を実験参加者に均等に配布した。また、216 名の実験参加者から回答が得られた段階で、質問紙の内的整合性をクロンバックの α によって評価した。 α 係数は、コ形の判断については .872 (30 談話, 46 項目)、ソ形の判断が .839 (30 談話, 47 項目)、ア形の判断が .739 (30 談話, 47 項目)、3 形式全体に関しては .914 (30 談話, 140 項目)であった。実験文の詳細は付録に記した。

3.1 現場指示での個人差と非現場指示との対応関係

現場指示の個人差と非現場指示使用との対応を確かめるため、本研究では、まず指示詞(コソア)と現場指示群の別を独立変数、適格性判断を従属変数とした決定木分析を試みる。分析には IBM SPSS Decision Trees (version 20) を用いた。SPSS Decision Trees による決定木分析では、Kass (1980) が開発した CHAID (chi-squared automatic interaction detector) というアルゴリズムが用いられる。CHAID では、従属変数に影響を与えられ考えられる複数の独立変数のなかから、予測に有意に働くものが選択され、カイ 2 乗検定の繰り返しを通して、独立変数が持つ条件の間で有意差がある場合にのみ、子ノード (child node) が生まれ決定木が成長する。決定木分析の有意水準には、検定の繰り返しによって正しい帰無仮説を誤って棄却してしまう第 1 種の誤り (Type I error) の確率を補正するために Bonferroni 法による p 値が参照されている。決定木分析を本研究に適用する利点の一つは、判断の内訳を俯瞰的かつ総括的に示すことができることである。各指示詞ならびに現場指示群について「良」、「可」、「不可」の分布が頻度・百分率によって一つの樹形図に表現される。また、分類結果に有意な影響を持つ要因が強いものから順に現れるので、複数の要因の階層性を検討するのに有効である。さらに、分類に当たって、統計的検定が行われていることも議論の厳密さを保証する。決定木分析の言語研究への適用については、コーパス分析の例が散見されるが (玉岡, 2006; Tamaoka & Ikeda, 2010; 木山 & 玉岡, 2011)、話者間の利害が背反する状況における言語形式の選択についての語用論的考察の例もある (Kiyama, Tamaoka & Takiura, 2012)。

決定木分析により得られた決定木を図 2 に示す。各ノード内の n は適格性判断の総数

を示している²。分析の結果、コ・ソ・ア 3 形式の主効果が認められた。適格性判断に最も強い影響を持つのはコソアの形式差異であると判断できる。また、ア形については、コソ群とコアソ・コソアソ群間に、コ形については、コソ・コアソ群とコアソ群間に有意な分布の異なりが認められた。

3.2 話者個人内でのコソア用法の関わり

次に本節では、コソア 3 形式の用法が個々の話者内で、どのように関わっているかを考察する。もしコソア 3 形式の使用規則が共通していれば、ある談話内位置における 3 形式それぞれの適格性判断は一致するか、背反する（「良」と「不可」）はずである。ここでは、3 形式についての適格性判断の一致の程度を評価するために、「良」、「可」、「不可」の判断をそれぞれ、1, 0, -1 の数値に置き換え、実験参加者個々につき、コソア 3 形式間の相関係数を現場指示 3 群それぞれについて算出した。相関係数は -1 と 1 の間の値を取る。各談話位置における 3 形式の適格性判断が多く一致すれば、相関係数は 1 に近づき、多く背反すれば -1 に近づく。従って、3 形式それぞれの使用規則に共通する部分が大きければ、2 形式間の相関係数（絶対値）は大きくなると予測される。適格性判断のコソア別相関係数平均値を現場指示群別に表 1 に示す。

表 1：適格性判断の現場指示群別相関係数平均値

現場指示群	n	コ-ソ	コ-ア	ソ-ア
コソ群	142	.545***	.599***	.424***
コアソ群	36	.565***	.580***	.270
コソアソ群	38	.457**	.145	.199

***p<.001, **p<.01

コソ群では、コソア 3 形式間の相関は全て正で有意だったが、コアソ群で有意だった対はコ-ソ・コ-ア間で、コソアソ群で有意だったのはコ-ソ間のみだった。

2 ノード 0 の「合計」は、216 名の参加者による計 140 の適格性判断の総数なので、参加者全員が漏れなく回答すれば 30240 (216*140) になるが、部分的に回答の欠損があるため、図 2 では 30187 となっている。SPSS による決定木分析では、以下の様に独立変数と従属変数を列状に配置する（例では「良」、「可」、「不可」の判断を、それぞれ 1, 0, -1 に置き換えている）。本文中の決定木分析では、適格性判断の総数が 30187 なので、データ行が 30187 行となる。

実験参加者名	現場指示群	談話内位置ID	形式	適格性判断
A	コソ	1	コ	1
A	コソ	1	ソ	-1
A	コソ	1	ア	1
B	コソアソ	1	コ	-1
B	コソアソ	1	ソ	0
B	コソアソ	1	ア	-1
C	コアソ	2	コ	0
C	コアソ	2	ソ	-1
C	コアソ	2	ア	1

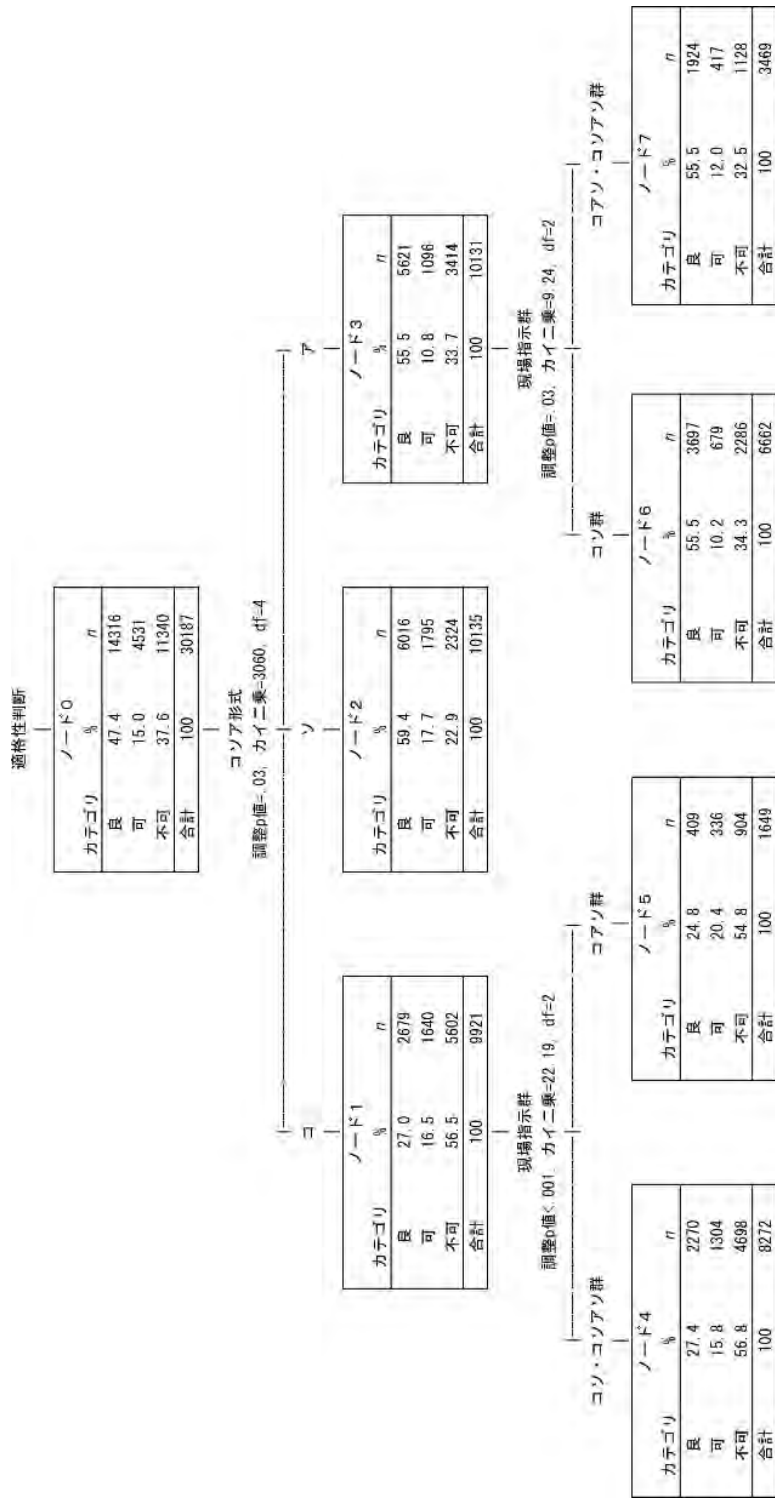


図 2: 現場指示 3 群とコソア形式を独立変数とした、適格性判断についての決定木

4. 考察

本研究では、コソアの現場指示と非現場指示が共通の規則に従っているなら、現場指示の個人差は非現場指示において体系的に現れるはずだと予測した。

決定木分析におけるノード1～3の存在は、非現場指示において、コソアの3形式が異なる使われ方をしていることを示している。コ形の非現場指示は一般に難しく、このことはノード1で「不可」の判断割合が50%を越えていることから窺われる³。決定木分析の結果、コ形とア形において、現場指示群の効果が認められた。ア形では、コアソ・コソアソ群の方がコソ群よりも「可」の判断割合が高い。「良」の判断割合に差は認められないが、非現場指示において、コアソ・コソアソ群はコソ群よりもア形をより多く受け入れる傾向があると言える。現場指示において、コアソ・コソアソ群がコソ群と異なるのは、話し手と聞き手を結ぶ直線上にア領域が存在することなので、ア領域が相対的に広いコアソ・コソアソ群が非現場指示においてもア形を多く受け入れることは、現場指示の個人差と非現場指示の解釈可能性が対応していることを示している。非現場指示におけるア形は、長期記憶内の出来事・情報を指示すると一般に考えられていて(加藤・町田, 2004)、ソ形において現場指示群の効果は認められないので、現場指示における個人差は、非現場指示では長期記憶の検索に関わっていると一般化できるかもしれない。但し、現場指示で話者間に存在するア領域の効果は、コ形では直接的ではない。非現場指示のコ形では、コソ・コソアソ群が、コアソ群よりも、「良」と「不可」の割合が高く、分散が大きい。コソ・コソアソ群とコアソ群の現場指示における質的な差異は、コ領域がソ領域に隣接するかどうかだが、この隣接関係がどのように非現場指示に関わっているのかは、現状では不明である。

適格性判断平均値の相関について、コソ群のコソア3形式はそれぞれに有意な正の相関を示した。このことは、コソ群では非現場指示のコソア3形式の使用規則に共通した部分があることを示している。しかし、コアソ群では、ソ・ア間の相関は低く、コソアソ群において有意な相関を示したのはコ・ソ間のみである。このことは、コアソ群ではソ・ア形の使用規則に共通部分が少ないこと、また、コソアソ群ではア形が独立した形式として振

3 一般にコ形の非現場指示用法は適格性が低いが、以下の下線部は現場指示3群に共通して適格性の高かったコ形の非現場指示使用例である。括弧内の数値は、「良」、「可」、「不可」の判断をそれぞれ、1, 0, -1の数値に置き換えた際の全参加者の判断平均値、番号は付録内の談話番号を示す。なお、以下の例は適格性判断の平均値が0.7を超えたものである。

5.「私は5年前リストラに遭い、脱サラしてラーメン屋を始めました。この業界もなかなか厳しいですが(0.82)、(中略)この仕事を始めて本当によかったと思っています(0.86)。」

14.「困ったねえ。君がこのプロジェクトは必ず成功させると言うから任せたのに、一体どうしてくれるんだい。」(0.87)

16.「食べ物も水もなく目の前で次々に死んでいく人々を見たとき、この現実を世界に知らせることが私の使命だと思ったんです。」(0.73)

24.(随筆)「いいか、ナオコ、これがぼくの短いアドバイスだよ。寒いことが、人の気持ちを暖めるんだ。離れていることが、人と人とを近づけるんだ。」(0.90)

25.(随筆)私たちは拍子抜けするほどあっけなく、佐藤先生の娘さんを探し出せてしまった。(中略)正直、こんなにスムーズにことが運ぶとは思わなかった(0.86)。

直前または直後の話題・言語形式を指す前方・後方照応で、かつ話者自身の直接経験や職業に関する情報についてはコ形の非現場指示用法が比較的容易である傾向が観察できる。

る舞っていて、非現場指示における照応と長期記憶参照の用法が異なる規則に従っていることを示唆している。

決定木分析においてコ形とア形の非現場指示に現場指示群の効果が見られることは、両用法を司る規則に共通部分があることを示唆している。その一方で、適格性判断平均値の相関は、非現場指示を司る規則に現場指示群間で異同がある可能性を示している。コソ群が伝統的日本語話者である事に鑑みれば、現場指示において話者と聞き手間にア領域が現れた変化が、非現場指示におけるア形の独立的振る舞いに対応しているが、両者の因果関係は不明である。

本論は、現場指示の個人差が（少なくとも部分的には）組織的に非現場指示に反映している事と、コアソ・コソアソ群がコソ群とは異なる規則に従って非現場指示を行っている可能性を指摘した。理論言語学では、伝統的に母語話者間に均質の文法を仮定し、研究者の直観を一次資料として受け入れてきた。訓練された研究者の直観が新たな理論的示唆を含むことは言うまでもないが、現代日本語におけるコソアのように質的な個人差が存在する場合、研究者個人の観察には限界がある。コソア使用のより正確な理解のためには、質的研究に加え、多くの話者を対象にした定量的研究が必要だと考える。

謝辞

本研究の遂行については若井知草氏（目白大学）の協力を得ている。また、二名の査読者には貴重な助言をいただいた。ここに記して、感謝申し上げる。

文献

- Fauconnier, Gilles. (1985) *Mental spaces*, Cambridge, Mass: MIT Press.
- Fillmore, Charles J. (1982) Towards a descriptive framework for spatial deixis, In Robert J. Jarvella and Wolfgang Klein (eds.) *Speech, Place, and Action: Studies in Deixis and Related Topics*. 31-59. John Wiley & Sons Ltd.
- Kass, Gordon V. (1980) An Exploratory Technique for Investigating Large Quantities of Categorical Data, *Applied Statistics*, 29: 119-127.
- Kiyama, Sachiko, Tamaoka, Katsuo and Takiura, Masato. (2012) Applicability of Brown and Levinson's Politeness Theory to a Non-Western Culture: Evidence from Japanese Facework Behaviors, *SAGE Open*, October-December: 1-15.
- Tamaoka, Katsuo and Ikeda, Fumiko. (2010) Whiskey or Bhiskey?: Influence of First Element and Dialect Region on Sequential Voicing of *Shoochuu*, *Gengo Kenkyu*, 137: 65-79.
- Yoshimoto, Kei. (1986) On Demonstratives *Ko/So/A* in Japanese, *Gengo Kenkyu*, 90: 48-72.
- あずまひろこ (1987) 「かわりゆくコソアド」『言語生活』2: 78-81.
- 加藤重広, 町田健 (2004) 『日本語語用論のしくみ』研究社.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』大修館書店.
- 金水敏 (2001) 「指示詞一直示再考」中村明 (編) 『現代日本語必携』160-163. 學燈社.
- 金水敏, 田窪行則 (1990) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3: 85-115.

- 金水敏, 田窪行則 (編) (1992) 『指示詞』 ひつじ書房.
- 金水敏, 田窪行則 (1992) 「日本語指示詞研究史から / へ」 金水敏, 田窪行則 (編) 『指示詞』 151-192. ひつじ書房.
- 木山幸子, 玉岡賀津雄 (2011) 「自他両用の「一化する」における自動詞用法と他動詞用法の比較—新聞コーパスの用例に基づく多変量解析—」 『言語研究』 139: 29-56.
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』 大修館.
- 黒田成幸 (1979) 「(コ)・ソ・アについて」 『林栄一教授還暦記念論文集・英語と日本語と』 41-59. くろしお出版.
- 佐久間鼎 (1951) 『現代日本語の表現と語法 (改訂版)』 厚生閣.
- 高橋太郎, 鈴木美都代 (1982) 「コ・ソ・アの指示領域について」 『国立国語研究所報告集』 71: 1-44.
- 玉岡賀津雄 (2006) 「「決定木」分析によるコーパス研究の可能性: 副詞と共起する接続助詞「から」「ので」「のに」の文中・文中表現を例に」 『自然言語処理』 13 (2): 169-179.

(2014 年 6 月 28 日受付・2014 年 10 月 20 日再受付)

付録：実験文

1. 「先生、おかげさまで〇〇会社に就職が内定しました。」「{これ/それ/あれ}はすごい。おめでとう。」
2. 「今度の土曜日、映画観に行かない?」「ごめん、{この/その/あの}日はバイトがあるんだ。」
3. 「最近の学生って、どうしてバイトのことを仕事って言うのかな。」「あ、{これ/それ/あれ}私も気になってた。私たちの学生時代は言わなかったよね。」「うん、{この/その/あの}頃はまだバイトと仕事は区別してたよね。」
4. 「ピクミンって知ってる?最近流行ってるらしいけど。」「知らない。何 {これ/それ/あれ}??」
5. 「私は5年前リストラに遭い、脱サラしてラーメン屋を始めました。{この/その/あの}業界もなかなか厳しいですが、{この/その/あの}とき思い切って決断して、{この/その/あの}仕事を始めて本当によかったと思っています。」
6. 「今朝も駅前で民主党の〇〇さん、演説してたね。」「{この/その/あの}人、毎日やってるね。」
7. 「営業部に新しく入った鈴木さん、どう思う?」「ああ、{この/その/あの}人か。なんか、前いた山田さんに似てるよね。」「そうかなあ。{この/その/あの}人とはちょっと違う気がするけど。」
8. 「{この/その/あの}日、いつもと変わらない様子で {この/その/あの}子は家を出ました。今思えば {これ/それ/あれ}が、最後に見た息子の姿でした。」
9. 刑事に夫のアリバイを聞かれた妻が、その場にはいない夫をかばって言うとき、「犯人は {この/その/あの}人じゃありません」
10. 「いよいよ明日は入学試験。今年こそは、絶対に合格したい!」「そうだね、{これ/それ/あれ}だけ勉強したんだから大丈夫でしょ。」
11. 「みんなの前で先生に叱られちゃった。もう {この/その/あの}授業には行きたくない。」「ん〜、でもさ、{ここ/そこ/あそこ}まで本気で叱ってくれる先生はありがたいよ。」
12. 「宇多田ヒカルが、お金なんて全然ほしくないって言ってたよ。」「{これ/それ/あれ}はもうお金いっぱい持ってるからでしょ。」「うん、{これ/それ/あれ}も否定しないって言ってたよ。」
13. (随筆) 人の心は、深くて、そして不思議なほど浅いのだと思います。きっと、{この/その/あの}浅さで、人は生きていけるのでしょう。
14. 「困ったねえ。君が {この/その/あの}プロジェクトは必ず成功させると言うから任せたのに、一体どうしてくれるんだい。」「すみません、{この/その/あの}ときは絶対にできと思ったんです。」
15. 「課長、あのう、相談したいことがあるんですけど、ちょっとここでは話しにくくて…。」「じゃ、飲みにも行くか。駅前に新しくできた居酒屋、{ここ/そこ/あそこ}でどうかな。」「ああ、{ここ/そこ/あそこ}はこの間行ったらすごく高くて、料理もイマイチでした。」
16. 「食べ物も水もなく目の前で次々に死んでいく人々を見たとき、{この/その/あの}

- 現実を世界に知らせることが私の使命だと思ったんです。」
17. 「昨日テレビで見たんだけど、ADHD という脳の障害があって、どうしても部屋を片付けられない人は、{この / その / あの} 可能性があるんだって。」「{この / その / あの} 番組ね、私も見たけど、{これ / それ / あれ}、私のことかと思っちゃった。」
 18. 「会社をすぐ辞める若者が多いと言われていますが、{この / その / あの} 理由の第一位は人間関係だそうです。」
 19. 「昨日の会議で佐藤さんが、社員をリストラする前に社長の給料を下げるべきだって言ったらしいよ。」「へえ。{この / その / あの} 会社で {こんな / そんな / あんな} ことが言えるのは {この / その / あの} 人しかないね。」⁴
 20. 「今悩むよりもとりあえずやってみて、問題が起きたら {これ / それ / あれ} は {この / その / あの} とき考えよう。」
 21. 「さっき山本さんと一緒にいた人、誰かな。」「{この / その / あの} 人は井上さんだよ。」「いや、井上さんじゃなくて、もう一人いたでしょう。」「ああ、{この / その / あの} 人は田中さん。」
 22. 二年前、散歩の途中でカミナリの音に驚いたポチは逃げ出してしまった。{これ / それ / あれ} 以来、ポチの行方は分からない。
 23. 大きな買い物をするときは、{この / その / あの} ときだけの感情で買わないこと。
 24. (随筆) 「いいか、ナオコ、{これ / それ / あれ} がほくの短いアドバイスだよ。寒いことが、人の気持ちを暖めるんだ。離れていることが、人と人とを近づけるんだ。」
 25. (随筆) 私たちは拍子抜けするほどあっけなく、佐藤先生の娘さんを探し出せてしまった。しかも {この / その / あの} 娘さんが佐藤先生と同じ教師をしているというのである。正直、{こんなに / そんなに / あんなに} スムーズにことが運ぶとは思わなかった。
 26. 「先生、田中さんが〇〇会社に就職が内定したそうです。」「{これ / それ / あれ} はすごい。よかったね。」
 27. 「先週の土曜日、同窓会行った?」「ううん。{この / その / あの} 日はバイトがあったんだ。」
 28. 「ピクミンって知ってる? 最近流行ってるらしいけど。」「知ってる。{これ / それ / あれ} はいいよ。」
 29. 刑事に隣人のアリバイを聞かれた人が言うとき、「犯人は {この / その / あの} 人じゃありません」
 30. 「いいいよ明日は合格発表。今年こそは、絶対に合格したい!」「そうだね。{これ / それ / あれ} だけ勉強したんだから大丈夫でしょ。」

4 「この会社」については現場指示の解釈が可能なので、非現場指示解釈の分析で、本例のコ形は欠損値とした。

Report

An Experimental Description of Deictic and Nondeictic Usages of Japanese Indexicals, *ko-*, *so-*, and *a*-forms.

TOKIMOTO Shingo (Mejiro University)

Abstract:

This paper experimentally discusses the relationship between the deictic and the nondeictic usages of Japanese indexicals, namely, *ko-*, *so-*, and, *a*-forms. Two hundred and sixteen Japanese native speakers were divided into three groups according to their differences in their deictic usages of the three indexicals. They were asked to make well-formedness judgments on various Japanese sentences including the three indexicals in nondeictic interpretations. A decision tree analysis was performed for these judgments with the three indexicals and the individual differences in the deictic usages as independent variables. As a result, the main effect of the three indexicals and the interaction between the three indexicals and the individual differences of the deictic usages were significant for *ko-* and *a*-forms. Further, the correlations between the judgments on the three nondeictic expressions varied in accordance with the individual differences in the deictic usages. These results suggest that some of the governing principles for the deictic and the nondeictic usages are common while some for the nondeictic usage vary according to the individual differences in the deictic usages.

Keywords: indexicals, decision tree analysis, *a*-form for long-term memory.